

主において常に喜びなさい

年頭にあたり皆様とご家族、共同体の上に 神の豊かな恵みと導きをお祈り申し上げます。

世界にとっても日本にとっても 厳しい新年の幕開けとなりました。能登半島の今も孤立した家や避難所で、水も食料も燃料も足りず、余震や雪や寒さの中で忍耐の限界を超えるような苦しみに耐えておられる方々のことを思うと、表題に掲げた聖パウロの言葉：「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。」＜フィリッピ書4章＞が現状にそぐわないようにも聞こえます。能登の方々の、そしてガザやウクライナなどで未だ止まぬ戦火の中で不安と苦しみ、肉親を失った悲しみに泣いている人々のことを思うとき、自分だけ手放しで喜んでなどいられないのではないのでしょうか？

一方私たち人間は、喜ぶために生まれてきた者であり、喜びなしには生きていけない存在でもあります。パウロは「喜ぶ人とともに喜び、泣く人とともに泣きなさい。」＜ローマ12:15＞と書きます。ではいつ喜び、いつ泣けばいいのでしょうか？

パウロは言います、「常に喜びなさい」と。いいことがあったとき、物事がうまくいったとき、成功したとき、健康なとき、お金が沢山あるときだけでなく、すべてが裏目に出るとき、物事が思うように運ばないとき、自由、名誉、富などすべてが剥奪されたようなとき、苦しみ、痛みで囲まれている時でさえ喜びなさい、常に、と言います。

事実パウロが 愛するフィリッピのキリスト教徒たちにこの手紙を書いたのは、およそ喜びとは無縁に見える獄中からでした。宣教の自由を奪われ、暗く、寒く、恐ろしく不衛生な牢獄に閉じ込められながら、どうして喜びと愛にあふれた手紙を書き送ることが出来たのでしょうか。

パウロがここで言う「喜び」は、皮相的な楽しみ、嬉しさ、面白さといったものではなく、鳴り物入りの騒々しい楽しさとは異質のものでした。もっと内面的で静かな、深い心の喜び、平和な充実感とでもいえるものでしょう。

表面的な安楽は、精神的、肉体的苦しみとは相いれないものですが、心の内奥に秘めた喜びは、何物にも奪われることのない、深みのある揺るがない喜びと言えるでしょう。これは人間の力だけで獲得し、保ち続けられるのではなく、人間を超越する絶対者、主なる神から与えられ、神に根差すときはじめて心に芽生え、育っていくものだと思います。

それゆえパウロは、「主にあって常に喜びなさい」と書きました。今年も愛と喜びの源である主をひたすら求めて歩んでまいりましょう。 塩谷恵策 SJ